

教師の授業設計と授業観に関する一考察：
熟練教師の授業設計の事例を手がかりとして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 靖芳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006840

教師の授業設計と授業観に関する一考察 — 熟練教師の授業設計の事例を手がかりとして —

Consideration concerning the teacher's class design and class seeing
— The case with the class design of the skill teacher as a clue —

石上靖芳*

Yasuyoshi ISHIGAMI

1. はじめに

教師は専門職であり、反省的实践家である必要性が叫ばれている。とりわけ教師の仕事の中でその大半を占めているのは日々の授業である。そのため授業力向上は、教師として教鞭を執り続ける限り常に求め続けなければならない課題であり、授業実践とその自己省察や同僚からの批判的吟味を通して、技術とセンスを磨いていかなければならないという使命を負っていると言ってよい。技術とセンスとは、教えるべき内容を子どもの実態に即し教材化したり、単元を構想したりする授業構想力や授業展開の中で駆使する教授方略や教授技術の豊富さと言えるだろう。例えば、授業場面では、教材で子どもをひきつけること、子どもへの対応から意見を引き出したり、子どもの発言に耳を傾けその発言をつないだり、問い返したりする技術でもある。授業設計においては、教材をどのように取り扱い子どもたちに出会わせるのか。また、目標（ねらい）をどこに絞るのか、その目標実現のために課題をどう設定し、どのように発問を構成し学習活動を展開していくのかなどの構想力でもある。これらの授業設計に関する力量の向上を図っていくことは、極めて重要な営みであり、この設計段階に教師の授業に関する技術とセンスが表れるとあってよい。実際には教師の授業に関する力量形成は、授業設計、実践、評価、修正というプロセスを繰り返すことにより、獲得されていく過程として捉えることができる。以上述べたことを考えるならば授業案は、設計者である教師自身の授業観や教材観や子供観までも示されている設計図とも言えるのである。

ところで学校現場においては、授業案を記述するという場面は、教育委員会等の指導主事の学校訪問をはじめ、自主的に取り組む公開授業研究会や校内授業研究会などのときであり、略案（簡素に展開を記述する）と細案（教材観、子どもの実態などを含めて詳しく記述する）の2通りがある。通常教師であるならば、年に最低2～3回は授業案を記述する機会があり、授業設計を通して自分の授業実践を捉え直す機会となる。日常の授業において教師は、念頭に授業展開を構想し、必要があればメモ書き程度のものに記して授業実践を行っている。何を大切に授業を設計し実践するかは、一人ひとりの教師の持っている授業観や教材観などの価値観や信念によるところが大きく、これらは教師の職能発達とともに培われてきた力量である。

このような授業や授業設計に関しての先行研究は、教育工学の分野においてシステムアブ

*附属教育実践総合センター

ローチという手法をとり入れながら研究が発展してきた。すなわち、授業設計の段階において、授業を仮説・検証の過程として見なし、この仮説が検証できる形をとり、生徒についての評価とともに、教授活動そのものを評価する手順を含め実証的なデータを収集することで、公共的な知識や法則を生み出すことを目指してきたという点である⁽¹⁾。このような教育工学を基盤にした授業設計の研究は、沼野、水越、坂本、西之園らに代表される。沼野⁽²⁾は、教授目標を目標行動に具体的かつ明確に示す必要性を説いた上で、それを達成するに必要な下位目標行動を明らかにする目標行動の論理分析を開発し、教授フローチャートやプログラム学習に多くの知見を示し、この分野の研究をリードしてきた。水越⁽³⁾は、沼野らの知見を踏まえた上で、メディアの選択と利用のあり方や個人差に対応するコース作りや学習指導法の有効性について、多くの知見を明らかにしてきた。西之園⁽⁴⁾は、様々な授業設計に関するアプローチの特徴を整理し、仮説としての授業設計の重要性を説いている。特に、教師の授業観が授業設計において大きな影響を与えることや、認知的な視点から、教材、生徒、教師の情報伝達を媒介とするコミュニケーションモデルを提案している。また、吉崎⁽⁵⁾は、授業の構成要素として、教材内容についての知識、教授方法についての知識、生徒についての知識の3つの領域をあげ、これらは相互に関連を持つ複合的な知識として構成されていることや、教師の授業実践力は教職経験を積むことにより、信念とし獲得されていくことを述べている。さらに、授業や授業設計に関して、教師の認知過程と教授技術とを結びつけ、その意思決定過程についての知見を示してきた。

最近では、教科教育の内容や教育活動に影響を与える教師の価値観や信念に関する研究が教師研究として盛んになってきている。しかし、一人ひとりの教師が授業技術の力量形成とともに培われてきた価値観や信念が、具体的な場面である授業展開や教授方略にどのように用いられているのかを明らかにしている研究は、散見はされるが多くはないのが現状である。

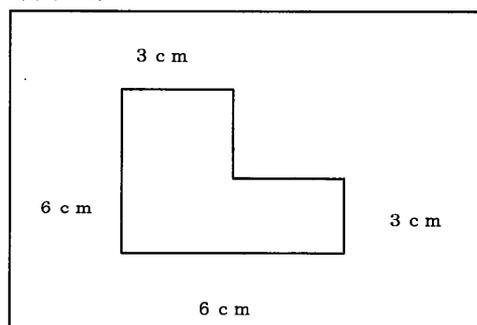
そこで、本研究は教師の授業設計に関して、現職の教師である熟練教師（教職経験10年以上）に、特定の素材を示し、その授業案を設計してもらうことで対象とする素材をどのように解釈し教材化するのか、また、どのような授業観（価値観）や教授方略に基づいて授業を設計しているのかを分析し、その特徴や傾向を明らかにすることを目的とする。熟練教師の授業観や教材観をはじめ設計段階における教授方略を明らかにすることができれば、より具体性をもってその知識や方略を重点的に取り扱うなど、教員養成段階等におけるカリキュラムや初任者研修の内容にも反映させることが可能となると考える。

2. 研究方法

2-1. 調査内容1

小学校4年生の教科書で取り扱っている複合図形の面積を求める教材（素材A）、小学校5・6年生の国語で取り扱う俳句の教材（素材B）のいずれかを選択してもらい、それぞれ1時間扱いを想定し、授業案（略案）を設計してもらった。

（素材A）



(素材B)

「閑さや岩にしみいる蟬の声」(出典、松尾芭蕉、「おくの細道」)

2-2. 調査内容2

授業案設計後に、下記5つの内容に関して調査を行った。

- (1) 授業案を設計するにあたり、工夫したり大切にしたりしたことは何ですか。具体的に箇条書きでお書きください。
- (2) 授業案を設計した手順を例にならってお書き下さい。(例以外のものがあればその言葉を用いてお書き下さい。)
(例) ①発問 ②手だて ③授業展開 ④目標 ⑤予想される子どもの表れ ⑥評価方法 ⑦単元 ⑧時間配分 ⑨個別・小集団・一斉の授業形態 ⑩学習課題 ⑪学習活動
- (3) (2)で回答した設計手順についてなぜそのようにしたのかを具体的にお書き下さい。
- (4) 実際にこの授業案で授業を行う場合、どんな点に注意しようとしていますか。箇条書きでお書き下さい。
- (5) 授業案設計に際して参考にしたものがあればお書き下さい。

2-3. 調査対象

静岡県内の小中学校に勤務している12名の教師(教職経験13年~26年)に、算数及び国語の授業案の設計を直接依頼し、設計後に調査項目に回答してもらった。算数及び国語の選択は、原則として設計者が選ぶこととした。その結果、算数を選択した教師が7名、国語を選択した教師は5名であった。

3. 結果および考察

3-1. 教師の授業設計の手順について

付表1~3は、算数及び国語の授業案と設計に関する調査結果を9項目にまとめ一覧にしたものである。「(授業)形態」、「目標」、「評価」、「発問」と「備考(手立て)」の項目は、設計された授業案の中に記述されていたものを書き出したものであり、「大切にしたこと」、「設計した手順」、「工夫」、「(授業を実際に行う場合の)注意点」の項目は、授業案の設計後に回答してもらった調査内容である。それぞれの教師の設計した授業案は、個性があり、工夫が見られた。教師が何を大切に授業を設計するのかは、それぞれの教師が持っている授業観や教材観などのそれぞれの価値観によって、目標の設定、課題の与え方、子どもへの手だての方法、授業構成(授業展開)において相違が見られた。特に、国語の俳句を素材とした授業設計においては、教師が教材をどのように解釈し目標を設定するかという授業観や教材観によって、その捉えの幅は広く、目標の設定や授業構成の内容に顕著に表れていた。一方、授業を設計する手順や授業形態の展開などの教授方略においては、共通性の高い内容のものが確認できた。「設計した手順」(付表参照)においては、目標を最初にあげた教師は全体の10/12(算数・

国語を含む)を占め、目標の設定の次に授業展開の内容である学習課題や発問、学習形態などをあげている。また、表1の①に示した記述は、国語の授業案を設計したMO教師(教職歴18年)が、調査項目の「授業を設計するにあたっての大切にしたい点」に記述した内容である。設計の手順について、まず、目標を確認し、俳句であるこの教材の目標を「短歌や俳句の表現を味わい、情景や心情などを創造しながら読むことができる。」のように設定している。次に、この目標を達成するための指導方法として、この俳句そのものを教材として追究していく方法(分析批評)と、芭蕉とこの俳句を追究していく方法(文芸研究)の2つの選択肢の中から、この「情景を捉えることで心情の理解につながる」ことが最善の方法であると判断し、前者の方法を選択している。その後は授業展開である、学習課題、発問、授業形態を設計している。そして子どもの表れを予想しながら授業展開の内容である発問や授業形態の修正を図り、評価方法、時間配分を確認している。同様に、算数の授業案を設計したWA教師(教職歴23年)は、「② 最初に本時で押さえない目標(ねらい)を設定する。続いてそのねらいを達成するために、子どもの実態を考えながら授業展開(学習課題、学習問題、発問、学習活動、授業形態等)を構想する。そして最後に評価方法、時間配分を考えた。」との記述があり、2人の教師ともに、まず目標を設定し、次に授業展開を設計している。その際に、予想される子どもの表れとの関連のなかで整合性を図りながら設計とその修正を行っている。このことは授業を設計する上で、子どもの表れを予想することは、大きな要因となっていることを示していると言える。

表1 教師の授業設計の手順について

- | |
|--|
| <p>① 目標と照らし合わせ、指導方法を決定した。目標については、「短歌や俳句の表現を味わい、情景や心情などを創造しながら読むことができる。」を重点とした。そこで、「情景と心情」に焦点をあてたとき、指導方法は、分析批評と文芸研究の2通りが考えられた。この句については、情景を捉えることで心情の理解につながると判断し、分析批評による指導方法とした。これをもとに学習課題を設定し、次に発問を考え、それにあてはまる授業形態を考えた。一斉形態で課題をつかみ、グループで考えを深め、個人でまとめることが効果的であると考えた。<u>その時予想される子ども表れによって、発問と、形態の整合性を確認した。さらに、観点別評価方法を確認した。最後に時間配分が適切であるかを確認した。</u>(MO教師)</p> <p>② 最初に本時で押さえない目標(ねらい)を設定する。続いてそのねらいを達成するために、<u>子どもの実態を考えながら授業展開(学習課題、学習問題、発問、学習活動、授業形態等)を構想する。そして最後に評価方法、時間配分を考えた。</u>(WA教師)</p> |
|--|

※ 下線は筆者

以上のことをまとめてみると、多くの教師は、図1に示したようなモデルで授業設計をしていると考えられる。与えられた素材の解釈から(ここでは、算数では複合図形の面積を求める。国語は芭蕉の俳句を教材化する。)、何を授業の中で指導するのかの目標を決定している。次に目標として適切であるかの確認を行い(教師の多くは学習指導要領で確認している。)、次にその目標を達成するためには、どんな指導方法や授業展開が考えられるかの大枠を構想し、学習課題、学習活動、発問等の内容の設計を順次行っている。また、同時に往還しながら常に子

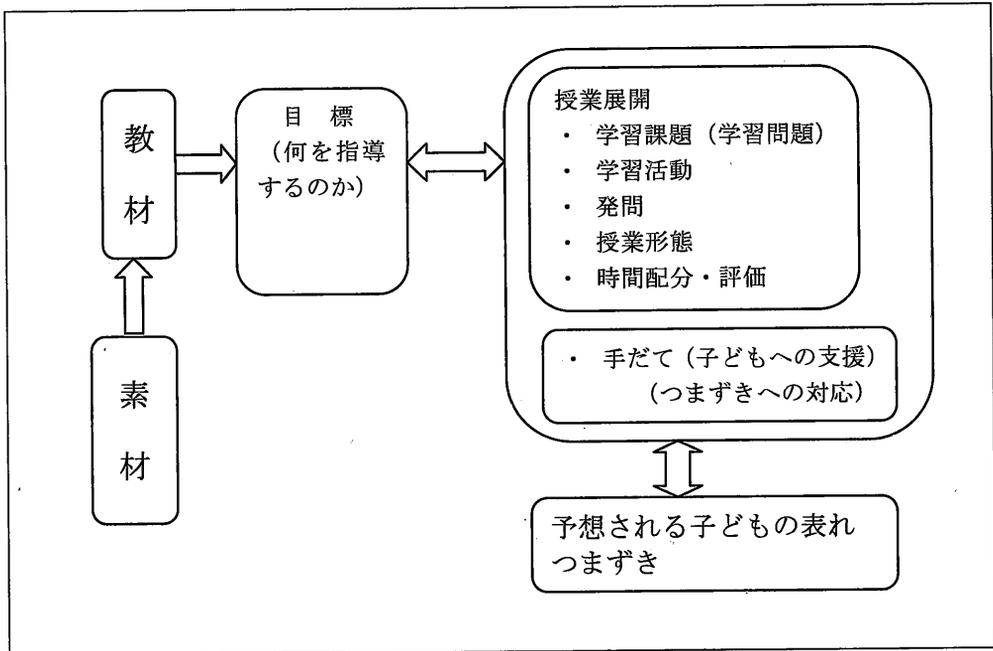


図1 授業設計の手順のモデル

もの表れやつまずきを予想しながら授業展開の内容の修正を図っていると考えられる。

授業設計に関して水越⁽⁶⁾は、授業設計における教師の思考過程として、授業の流れを念頭に「①授業案」、「②本時の目標分析」、「③児童・生徒の実態把握」、「④利用できるメディア、中心資料」の①から④を往復させて授業を組み立てていくと述べているが、授業展開の内容と、児童・生徒の実態把握の2つを関連づけ往還しながら設計している点に関しては同じ内容のことを指摘していると言えよう。

3-2. 共通授業形態について

設計された算数・国語の授業案の中に、学習活動の節目となる部分において「個、個別」「一斉、全体」「小集団、グループ」の記述が多く見られた。この授業形態への意識は教師の授業展開を構成する教授方略の1つであり、重要な要素となっておりと同時に教師の授業観が示されている部分である。図2に示したが、大きなまとまりとして捉えれば、「個別->全体->個別」(A)と「個別->小集団->全体->個別」(B)の2通りの形態が設計した授業案から見られた。算数では、(A)が5/7、(B)が2/7であり、国語に関しては、(A)が1/6、(B)が5/6であった。その1つである(A)は、教師はまず学習課題を提示し、「〇〇するにはどうしたらよいのだろうか」という問いを作り、個別学習に入る。そして全体の場において子どもたちの意見を交換する場を設定し、考えを深めたり広げたりすることを通して個々の学習を目標にまで高め、最後にまた個別にする形態である。この形態では、子どもたちがリレーのように発言をつないでいくような展開が小学校ではよく見られ実践されている。2つ目の授業形態である(B)は、課題提示後に個別により自分の考えを持たせ、その後小集団

(グループ)の形態をとり、考えを深めたり広げたりする場面を設定した上で、全体で協議をする展開である。この形態の場合、先に全体で意見交換をした後に小集団で協議を設定してある授業案も見られた。そして最後に個別学習でまとめを行うという展開である。これは、小集団活動を授業の中に位置付けるという形態でもある。小集団活動の意義については、全体での協議の直前に近くの仲間に話すことで潤滑油のような役割を果たすことが目的であるものから、小集団による協同による追究活動まで様々な内容が考えられる。(A)、(B)のいずれの形態も、全体の場合や小集団において子ども同士を関わらせることにより、意見や考えを交換し話し合うという活動を通して、学習に対する広がりや深まり、学んだことの定着を得るために用いる教授方略とも言える。このことは表2の①から③の教師の授業案の記述からも窺え、知識や技能を子どもへ一方的に伝達するのではなく、子ども同士の対話や活動を通して子ども主体の授業を構成することを意識した授業観が源となっていると思われる。このことに関して石上⁽⁷⁾は、小中学校の多くの校内研修において、授業の中で、子ども同士を関わらせることをテーマに掲げていることや、子どもの主観性、文脈性、相互作用(関わり合い)を重視する構成主義的な授業観が行動主義的なアプローチの授業観に変わって浸透してきていることを報告している。この(A)、(B)に見られる授業形態は、「子ども同士の関わり合う場」を意図的に設定し、目標を達成するために効果を上げる場面に適用するという教授方略を駆使している

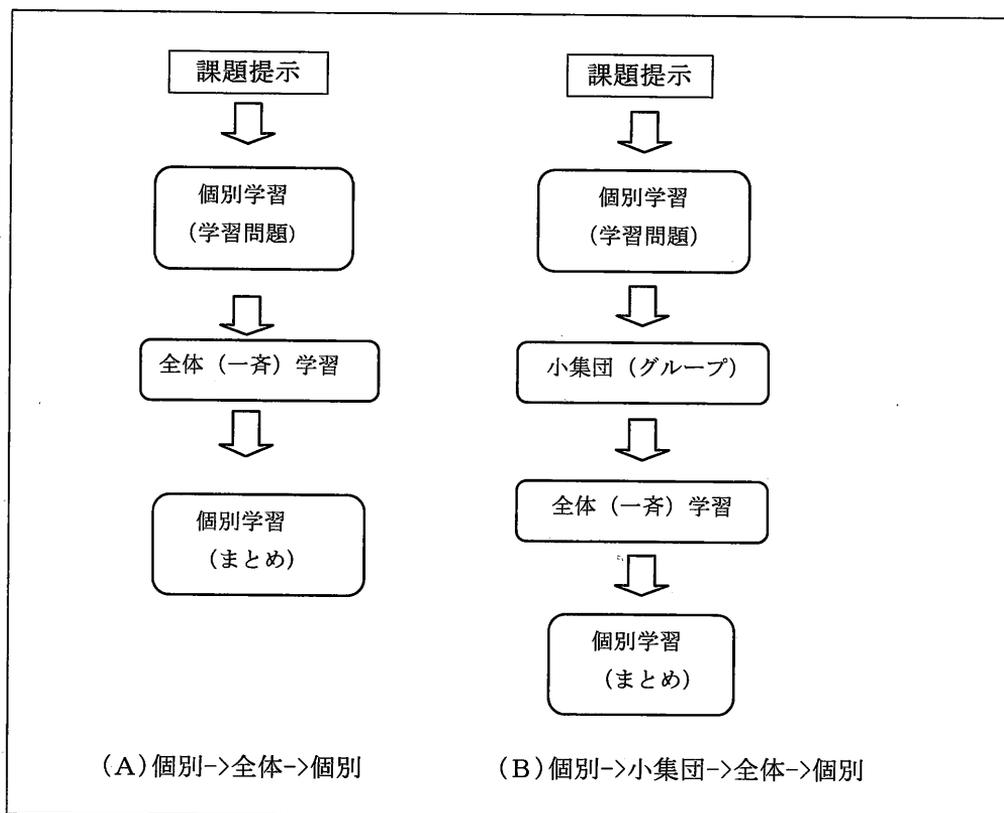


図2 学習形態のモデル

ものと捉えることができる。例えば、設計された授業案の展開の発問の中に「考えたことを話し合ってみよう」、「自分が気に入った方法を友達と話し合い、その中で、いつでも使える方法はどれか考えてみよう。」との記述が見られるが、課題に対して、個の考えを持たせた上で、さらに深めたい内容を、小集団による話し合い活動や全体での話し合いの場（練り合い）を設定することにより、確かなものにしていくという展開として設計されている。また、小集団活動（グループ活動）を用いる場合に、MO教師は実際に授業を行う際の注意として、「積極的な子どもの意見だけに決定してしまわぬよう自己のイメージをあらかじめ持つように支援する必要がある。（事前のグループ作りの配慮が必要である）」との記述があり、ただ単に小集団による学習活動を設定するのではなく、意図的なグループ編成をしていくことの大切さが述べられており、重要な視点を指摘していると言える。一人ひとりの子どもを活躍させる場面やねらいや状況によって（A）、（B）の授業形態を使い分けていくことは、子ども主体の授業を設計していく上で必要不可欠であり、教師として意識が高い教授方略の1つとなっていると言える。

このことに関して丸野⁽⁸⁾は、子どもの学習を中心に据えた対話型授業の必要性について触れ、小集団活動の意義（班活動）や対話型授業が成立するには「話し合い活動を支えるルールづくり」が必要不可欠であることを述べている。また、熟練教師の授業分析から、小集団活動を状況に応じて「意見先行方」（個→班→全体）、「意見構成型」（班→全体）、「状況対応型」（全体→班→全体）の3種類を使い分けている授業形態の事例を紹介しているが、参考になる視点を提示している。

表2 小集団・全体での関わることの教師の考え方

<p>① 1つの考えで終わりにせず、友達の他の考えを聞き合う中で、いくつかの求め方があることを理解しようとしていたか。（WA教師：算数）</p> <p>② 個の読みで終わらずグループへと形態を変え、友達の鑑賞にふれる場を設定することで、自己満足の読みからさらに発展した読みにつなげられるように期待した。（OZ教師：国語）</p> <p>③ 教え合うことにより、お互いの深まりと定着を図る。（OK教師：算数）</p>

3-3. 設計された授業案の見られた特色について

その他に授業案の設計において見られた特徴的なものを表3に示した。特に算数において多く見られた「② 既習知識を本時に生かす」は、単元展開をはじめとする系統性と積み重ねが大事であるという意識の表れとして捉えることができ、「④ 学級内の子どもたちへの差の配慮」は、個人差等によって差が生まれやすく、教師が考慮し、手立てを考える重要なポイントであると言えるだろう。国語においては、「① この俳句を詠んでイメージした情景を絵で表してみる。」「② 自分で俳句を作成する活動へつなげる。」のように、子どもたちの活動へつなげる授業構成が3人ほどあり、大きな特徴を示していた。これは、教材を通して何を学ばせるかの教師のもっている教材観に大きく起因するものであり、鑑賞に留まらないで俳句を作る活動こそが俳句を本当に理解できる、という授業観が表出していると捉えることができるだろう。

表3 その他に設計された授業案に見られた特色

算数：

- ① 課題から子どもの思考にそった多様な考えの予測
最高で5種類の解き方が示されていたが、子どもの実態を想定して解法の方法を予測している。
- ② 既習知識を本時に生かす
長方形の面積と正方形の面積の求め方の確認又は提示。
- ③ メタファーの利用
花壇、チョコレート、部屋などを用いて課題に現実性を持たせる等の工夫。
- ④ 学級内の子どもたちへの差の配慮
「低位、中位、上位」、「つまづいている子への支援」、「できる子への支援」などの記述が見られ、その支援策として図形に補助線を入れたヒントカードを与える、別のやり方を考えさせるなどが示されていた。
- ⑤ 個の追究時間の確保と意見交換の場の設定
自分の考えを作ることと交流することで考えを深めたり、広めたりする。

国語：

- ① この俳句を詠んでイメージした情景を絵で表してみる
「閑けさ」「岩にしみいる」「蝉」を分解し、言葉のイメージをふくらめた上で、その情景を絵に描いてみる。
- ② 自分で俳句を作成する活動へつなげる
俳句の基本的な知識やこの俳句の意味を押さえた上で、子どもが自分の俳句を作成する。
- ③ 他の俳人の句を取り扱う
子規などの他の俳句を紹介することで、文芸としての俳句を広く理解する。

3-4. 算数の授業設計に見られる教師の授業観と教授方略の事例について

(事例1)

教師の教授方略に関しては、教師が今までに培ってきた授業観や教材観などの価値観に大きく影響されていると考えられる。教師の持っている授業観からどのような場面で、その教師特有の教授方略が用いられているのかを、特徴のある2事例をあげ検討する。

資料1は、KU教師(教職歴14年)の設計した授業案である。KU教師は調査項目である「授業実施にあたっての注意」に際しての中で、「授業で学んだことが、算数の世界だけではなく、日常生活にも応用できることに気付かせたい」との記述があり、日常生活に応用できること、算数を学ぶこと(教科学習)は社会とつながっていることが大事であるという強い信念に基づいた授業観を持っていることが窺える。さらに「大切にしたいこと」では、「学習することへの必要感(動機付け)を持たせる展開」をあげ、「手立て」では、「どの子にも数学的な根拠をもった考えをもたせたい」と記述している。このような授業観を源にして、学習課題として、ただ単に、L字型の複合図形の面積を求めるのではなく、もう1つ少し違う面積のL字型を用意して、比較するという方略を用いている。そして子どもたちの日常により一層近づけるために、学習課題の発問として、身近な食べ物であるチョコというメタ

ファーを用い、「2つのチョコがあります。どちらのチョコをもらった方がとくかな。」「2つのチョコを比べるには、どうすればよいのだろうか」との発問を設定している。また、考え方を大切にしたいという授業観から最初は数値を入れてない問題を提示し、数学的な思考(推論)を大切にすることに焦点を絞り込み、子どもから求められた時にはじめて辺の長さを示すという方略を用いている。算数という教科にありがちなただ単に答を求めるのではなく、考え方や推論を重視している点は教科に対するセンスとも言える。具体的な授業における手立として、悩んでいる子どもへは、1cmの正方形に区切った別のプリントをヒントとして与えることや、すぐに解決できる子どもへは、1つの方法に留まらないで別の考え方もないかを問い励ます手立てが設定されている。授業形態においては、図2の(B)の型である個で追求する場面と、グループで話し合う場面、全体で意見交換をする場所を設定し、多様な考えを子どもたちから引き出すことによる内容面の広がり、それぞれの考えに共通するものを押さえることで一般化を図り、質的な深まりを期待した授業案を設計している。このKU教師に見られる授業観(信念)が源となって、算数を日常に近付けるための方略が、授業展開の中に随所に埋め込まれていると言える。また、支援や手だてが豊富であり、授業を構造的に設計していることが窺い見れる。以上KU教師の授業観と教授方略をまとめたものを表4に示す。

表4 KU教諭の授業観と教授方略について

授業観 (教職経験14年)	教授方略
<p>① 授業で学んだことが算数の世界だけでなく、日常生活にも適用できることに気付かせたい。</p> <p>② 学習することへの必要感(動機付け)をもたせる工夫。</p> <p>③ どの子にも数学的な根拠をもった考えを持たせたい。</p>	<p>授業展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メタファーと比較の活用 少し面積の違うL字型(チョコレートに例えている)の面積の比較という課題を作成。 ・授業形態 一斉->個別->小集団->一斉->個別 子どもへの手だて ・悩んでいる子への支援として求積する図形の1cmの正方形に区切ったプリントの準備など多数を考えている。

(事例2)

次に資料2は、OK教師(教職経験15年)の設計した授業案である。また、調査項目の「大切にしたいこと」では、「単元構想(流れ)」、「図形領域の前後の学年の指導内容のつながり」、「図形領域における算数的活動(切る、折る、貼る、測る、補助線を引くなど)」をあげ、算数の教科の視点から、カリキュラムとしてのこの教材の位置付けや、算数的活動をどのように構成していくのかという教科の本質を踏まえ、授業実践につなげていこうとする授業観や教材観を窺うことができる。OK教師は、中学校の数学の教師の経験もあり、こうした経験が授業観や教材観に大きく影響しているものと思われる。このような価値観から、授業案設計では、目標を「①既習図形の求積方法を生かして考えることができる。(数学的な考え方)」、「②友達との話し合いの場面で、説明や質問など、課題解決に向け積極的に関わることができる。(興味・関心・意欲)」の2つを設定している。目標の設定に関して、他の教師の多くが「～求積することができる」の表現・処理を設定しているのに対して、数学的な考え方に焦点をあてている点は注目に値する。これは、ただ単に正解を求めるのではなく、数学的な思考のおもしろ

さを伝えたいという授業観の表れと捉えることができる。

授業展開では、まずメタファーを用いて「4年生の花壇に肥料をまきたい。花壇の面積を求めてみよう」の課題提示から入り、1cm²のマスキに区切った方眼の数を教えて解を求めて確認するという方略を用いている。(単位面積を基準にしてその解を求める方法。)その後、「くの字型の面積を今までに習った面積の求め方を使って求めるにはどうすればよいのだろう。」と発問し、次の展開につなげている。授業において子どもの多様な考えかたが大事であるという理由で、どんな意見や稚拙な考えであってもよいというような意見もよく聞かれるが、目標とずれないように子どもの思考の方向を予め定めると同時に焦点化し、最初の課題提示の場面で1cm²のマスキである単位面積あたりで正解を求めてしまい、既習事項である長方形の面積を利用して解く展開としたこの方略は巧妙である。(もちろん、目標を達成するためには少し外れている考えや稚拙な考えを授業の中で取り上げ、子ども自身がそれを超えていくように仕組むことも教師の方略の一つでもある。)そして、多様な考えが予想される求積方法に関しては「分割方式、正方形→正方形、倍積変形、等積変形・回転移動、等積変形・移動(面積保存)」の5種類を想定し、それぞれの求める方法の価値を把握しており、算数という教科への深い理解と知識の豊富さが窺える。授業展開の終盤では、小集団でそれぞれの求積の方法のよさやいつでも使えそうな方法を協議することで一般化を図る展開となっている。

このOK教師に設計に見られるような目標の明確さ、授業展開に見られる教授方略や手立ての豊富さこそが、子どもたちの学ぶ意欲を喚起し、教科の本質やおもしろさを伝え、確かな力をつけていく授業になりうると予想することができる。今後、教師に求められる力量である教科の本質をつくような授業展開を構成していくためには、OK教師の教科に対する見識と教授方略のセンスは参考となる。

2名の教師の授業設計の事例に関して、それぞれの設計された授業案は、それぞれの教師の持っている授業観や教材観に大きく影響していると考えられる。これらの価値観は教師の教職経験において形成されてきているものであり、教師の個性の一面としても捉えることができるだろう。

表5 OK教諭の授業観と教授方略について

授業観 (教職経験15年)	教授方略
<ul style="list-style-type: none"> ・単元構想(流れ)を重視する。 ・図形領域の前後の学年の指導内容のつながりを確認する。 ・図形領域における算数的活動を位置付ける。 ・児童の実態やこれまでの学習の定着の様子を把握する。 	<p>授業展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メタファーの活用 「花壇に肥料をまきたい。花壇の面積を求めてみよう」 ・授業形態 全体->個別->小集団の授業形態 子どもへの手だて ・既習図形の求積方法の揭示。 ・段階別ヒントカード。 ・話し合い活動をするための指導。 ・多様な考えを価値付けることで一般化へつなげる。

3-5. 国語の授業設計に見られる教師の授業観と教授方略の事例について

5・6年生の国語の学習内容である、「閑けさや岩にしみいる蝉の声」の俳句を素材として取り上げ、授業案を設計してもらい、設計後に調査項目に回答してもらった。国語という教科の特性にもよると思われるが、算数と比べてさらに教師のこの教材を捉える教材観や授業観によって多様な授業展開の設計が見られた。国語に関しては、教材を解釈する幅や授業展開が多様なだけに、教師が持っている授業観や教材観が表れやすい傾向にあると言える。ここでは2名の教師の設計事例を取り上げ検討する。

(事例1)

資料3は、OZ教師（教職歴15年）の設計した授業案である。大切にしたいことについては、「教材をどのように子どもの活動につなげるのか（教材を学ぶのではなく、教材で学ぶこと）」、「俳句の読みとり終始しない」、「書写における短冊作り、図工などの事後への活動に生かせるようにする」との記述があり、目標を「芭蕉の俳句を読み取ることを通して俳句の作り方やおもしろさを知り、自分でも俳句をつくってみる」と設定している。このことから、俳句の読みとりから、さらに子ども自身が俳句作りをする体験を通して、俳句という文芸を深く理解することにつなげていくことや、他の教科の活動へと有機的に関連付けることで、学習を深めることが大切であるという授業観を持っていることが窺える。他の教科との関連を図ることはカリキュラムマネジメント能力の一つであり、子どもたちに教科全般に渡って、学ぶことの意味を明確に伝えていくことを意識したものであると言える。このような授業設計に用いた方略は、今後益々重要となってくることを指摘しておきたい。こうした授業観から、授業展開としてこの句を最初に提示し、考えられることを全体場で話し合い、「気付くこと（文の形：リズム）」、「わかること感じたこと（文の内容）」、「知りたいこと（疑問）」の3つのカテゴリーにまとめ、知りたいこと（疑問）を後の展開につなげていく方略を用いている。「子どもの意見から展開する」との記述からも窺がえるように子どもの発想や考えを上手に3つにまとめ、後の展開につなげていくように設計しているのは、持っている授業技術の高さとセンスに他ならない。次の展開として、俳句で押さえなければいけない基本的な知識である「5・7・5」の文字で作成されていることや季語などの基礎的な内容を押さえた上で、「松尾芭蕉はこの俳句で何を伝えようとしたのだろうか。」の発問を設定し、学習問題へと展開をつなげている。さらにここでは、小集団での話し合い活動を取り入れ、その後全体で協議し、個人の俳句を制作する活動へと展開を結びつけている。実際の授業実施においては、節となる展開場面において、子どもたちの学習状況の進展によっては、時間の配分をあまり意識しないことをあげており、授業を進める上で、その場面ごとにおける臨機応変な対応の必要性が記述されている。これは、子どもの学習状況によって展開する内容や時間を捉えていこうとする授業観であり、時間に制約されるのではなく、子どもたちの学習内容によって時間が規定されるという価値観を持っていると捉えることができる。

表6 OZ教師の授業観と教授方略について

授業観 (教職経験15年)	教授方略
<p>教授方略</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材をどのように子どもの活動につなげるか。(教材を学ぶのではなく、教材で学ぶこと) ・俳句の読みとりに終始しない。 ・書写(短冊)や図工などの教科に関連付けて事後の活動に生かせるようにする。 	<p>授業展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・俳句を提示し、「気付くこと」「分かること・感じたこと」「知りたいこと(疑問)」の3つのカテゴリーに分類して子どもの意見から展開する。 ・俳句を作る活動につなげる。 ・授業形態 個別->全体->小集団->全体->個人 子どもへの手だて ・疑問を後の展開につなげようとする。 ・自分たちが受とり手であることを意識して伝わってくることを話し合う。 ・俳句の受け取り方に正誤はないことを示唆する。

(事例2)

次に資料4は、SA教師(教職歴14年)が設計した授業案である。授業案を設計する上で大切にしたいこととして、「言語活動を通して育む資質・能力」、「子どもの興味・関心の持続」、「学びの充実感」、「学習内容の定着」、「学びの継続につながる環境整備(教室掲示・他作品紹介)」の5点をあげ、目標を「俳句の言葉のリズムやすぐれた表現に目を向けて読むことを通じて味わい、俳句に含まれる語感や自分の思いを自分なりの方法で表現することができる。

(言語の力)」と設定している。そして、ただ単にこの俳句の読みや理解に留まらないで松尾芭蕉と子どもの世界をいかに近づけるかを授業を実施する際の注意点として述べている。さらに、学習活動を発展させていくための工夫として、言葉で表現しきれない部分を絵・色で表現することや、事後の発展として学級内での掲示や校内行事や身の回りの生活を題材にし、句に親しむ活動を単元構構に位置付け展開することが記述されている。このような授業観から、授業展開においては、導入において「奥の細道」の路程図を提示し、芭蕉の旅の行程を地図で辿り、様々な情報をもとにして芭蕉の旅の目的を予想させることで、興味・関心を高める方略を用いている。次に、「芭蕉の俳句の世界を味わおう」と課題提示をし、この俳句の内容を把握するために、「閑けさ」、「岩にしみいる」、「蟬・蟬の声」の3つに分類し、それぞれの言葉のイメージから何を思い浮かべるかを問い、それぞれの言葉のイメージを深く押さえることで、この俳句の理解に迫ろうとしている。そして、この俳句から思い浮かんだイメージを言葉や絵で表す活動の場を設定し、全体の場でそれぞれの考えを紹介する展開へとつなげている。また、イメージを豊かにするために、山寺の動画を見せるというメディアの活用やこの俳句にまつわる論争をエピソードで紹介するなどの方略を用いることで、芭蕉の世界に近づけようとして質的な深まりを期待した設計となっている。

以上、国語を選択した2人の教師の授業案の設計から授業観や教材観からどのような教授方略が用いられているかを検討してきたが、いずれにおいても教師の経験や授業観が源となって、素材をどのように教材化するのか、またどのようにして教材と向き合わせていくかが授業案に表出されていると言える。

表7 SA教諭の授業観と教授方略について

授業観 (教職経験14年)	教授方略
<ul style="list-style-type: none"> ・言語活動を通して育む資質・能力を確認する。 ・子どもの興味・関心の持続を図る。 ・学びの充実感・学習内容の定着を図る。 ・学びの継続につながる環境整備を図る。 (教室掲示・他作品 紹介) ・芭蕉の子どもの世界をいかにして共有させるか。 	<p>授業展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「奥の細道」旅程図を導入で利用し興味関心を高める。 ・「閑けさ」「岩にしみいる」「蟬」の3つのイメージにして取り扱う。 ・俳句のイメージを絵や言葉で表現する。 ・授業形態 全体->個別->小集団 <p>子どもへの手だて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・俳句の土台をなす言葉や表現に注目して進める。 ・イメージがわからない子どもには、山寺立石寺の動画を見せる。

4. まとめ

教師として長年に渡っての授業実践を通して、教授技術をはじめとする教師の力量が形成されてきていることは紛れもない事実である。また、その力量形成とともに授業観や教材観等の価値観が醸成されてきていることも事実であり、それは教師としての個性にもつながっているものである。本稿においては、12名の熟練教師の授業案設計における授業観や教授方略について分析を試み、あくまでも事例であり断言することはできないものの、以下大きく3点に関して熟練教師の授業設計に関する授業観と授業方略についてその特徴と傾向が明らかになったと言えよう。

- ① 授業案を設計する手順において、教材(素材)の価値から何を指導するか目標の設定を最初に行い、続いて学習課題、学習活動、発問、授業形態などの授業展開を設計している。この際に、予想される子どもの表れを常に念頭におきながら修正を加えるなどの手続きを往還的に行っている。このことは、教師が授業設計をする場合において、子どもの反応や応答などの表れを予想することは重要な要因となっていることを示している。
- ② 授業形態については、大きく「個別」、「全体(一斉)」の組み合わせと「個別」、「全体(一斉)」、「小集団(グループ)」の組み合わせの2つが活用されている。これは目標を実現させるために、子ども同士の関わり合い(相互作用)から学習の内容を深めたり定着させたりという方略として用いているものである。
- ③ 授業設計において、素材を教材化し、それを展開する内容や構成については多種多様であるが、それぞれの教師が教職経験とともに培ってきた授業観や教材観が、授業設計やその中で駆使する教授方略に大きな影響を与えている。

今後さらに多くのデータを収集することや教師がどのような過程を経てこのよう授業観や教材観を形成してきたのか、また、実際に授業を行った場合、子どもの反応を含め設計段階とのズレをどう認知し修正していくかなどを、授業実践の分析と併せ明らかにしていくことを課題としたい。

謝辞

日常の業務等で忙しいにもかかわらず、面倒な授業案設計を快く引き受け、協力して下さった多数の先生にこの場を借りて心からお礼を申し上げます。

<注>

- (1) 沼野一男・平沢茂『教育の方法・技術』学文社、1989、pp17-20
- (2) 沼野一男『授業の設計入門』国土社、1976
- (3) 水越敏行『授業改善と学校研究の方法』明治図書、1985
- (4) 西之園晴夫『授業の過程』第一法規、1981
- (5) 吉崎静夫『教師の意志決定と授業研究』ぎょうせい、1991、pp86-99
- (6) 水越敏行「なぜ授業を評価するか」東洋他（監修）『授業を改善する－授業の分析と評価－（授業技術講座第2巻）』ぎょうせい、1988、pp.3-14
- (7) 石上靖芳・望月博視『公立小中学校の授業改善への取り組み状況と校内研修の実態について』静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）第56号、2006.3
- (8) 丸野俊一「授業の効果を上げる」高垣マユミ編『授業デザインの最前線』北大路書房、2005、pp124-153

設計された授業案の内容

教科/教師/職階	大切にしたこと	設計した手順	形態	工夫	注意点	目標	評価	発問	備考(手立て)
算数 KU 14年	学習することへの必要感をもてる展開。 面積を求める必要を感じられる発問か。 「2つのチョコがあります。どちらのチョコをもった方が特かな」 既習事項を生かして面積に注目して比べられる思考の流れを組む。	①目標 ②単元 ③子どもの実態 ④学習課題 ⑤発問 ⑥予想される子どもの流れ ⑦授業展開 ⑧評価 ⑨授業形態 ⑩時間配分	B型 個 小集団 全体	もう1つ少し面積の違うL字型を用意して比較しなければいけない場面を作った。	授業で学んだことが、算数の世界だけで適用するものではなく、日常生活にも応用できることに気付かせたい。	長方形と正方形の面積の求め方を学習した子どもたちが、L字型の面積を考えるとことよって、L字形は長方形と正方形を組み合わせた図形として長方形と正方形の面積の公式を理解することを目指す。(知識理解)	自分なりの根拠に基づいた推論をしているか(思考) L字型の面積は、長方形と正方形の面積の公式を使って求められることを理解している。(知識理解)	既習事項の確認 (一斉)①2つのチョコがあります。どちらのチョコをもった方が特かな (問)②2つのチョコを比べるには、どうすればいいのだろうか (問)③2つのチョコの面積を求めてみよう(グループ一斉) ④考えたことを話し合ってみよう ⑤わかったことをまとめよう	①どの子にも数学的な根拠をもった考えを持たせたい。 ②悩んでいる子には面積の単位量が1cm ² であることを確認し1cm ² の正方形に区切った別のプリントを与え、正方形の数を数えるように助言する。
算数 OK 15年	単元構想 ・図形領域の学年のつながり ・図形領域における算数的活動	①学習問題 ②目標 ③授業展開・発問 ④手立て ⑤予想される子どもの流れ ⑥学習活動・学習課題 ⑦評価方法 ⑧授業形態 ⑨時間配分	B型 個 小集団 全体	・学習問題自体に解決方法があるのでそれを生かした思考の流れ ・操作活動などの様々な算数的活動の支援 ・話し合い活動するための指導 ・多様性の中でも、その価値付けをすることで、一般化へつなげていく。5年生での三角形、平行四辺形へつなげていく。	・既習内容の公式をうまく使えるために、操作活動をする上での具体物やワークシートの工夫 ・話し合い活動での、相手にわかりやすい説明、わからないところの質問など、双方の伝達。(興味関心意欲)	①複合図形の面積の求め方を、既習図形の求積方法を生かして考えることができる。(数学的考え方) ②友達との話し合いの場面で、説明や質問など、課題解決に向けて積極的に関わることができる。(興味関心意欲)	個々に追究する場面で、様々な求積方法で、くの字型の面積を求めることができたか？	(全体・課題提示) ①4年生の花壇に肥料をまきたい。花壇の面積を求めてみよう。(学習課題) (個別・問題把握・追求) ②くの字型の面積を今までに習った面積の求め方を使って求めるにはどうすればよいのだろうか。(学習問題) (小集団・一般化) ③自分が気に入った方法を友達と説明し合い、その中でも使える方法はどれか考えてみよう。 ④まとめ(自己評価)	①既習図形の求積方法を提示しておく(正方形・長方形) ②くの字のワークシートの準備 ③1つの求積方法で満足せよ促進 ④他への支援(段階別ヒントカード) ・既習の求積方法とその公式の確認 ・その形にするためにくの字型をどうすればよいかの見出し ⑤この図形だからできる方法からの一般化 ⑥教えあうことによるお互いの深まり、定着をはかる。
算数 OZ 17年	①「できた」喜びをみんなが味わう。 ②いくつかの方法があることに気付く(みんなで考え話し合う) ③いくつかの方法で求積することができる。	①目標 ②予想される子どもの流れ ③授業形態 ④授業展開 ⑤手立て ⑥発問 ⑦時間配分 ⑧評価	A型 個 全体	①明らかに差があるので、それぞれが満足できる場(いくつか考える・ヒント活用) ②話し合いの中で、自分が想像しなかった解法を知る(学び合う)	・昔手の子が自分でチャレンジできるように支えること ・時間差が生じること	合成された図形の面積を、正方形や長方形に分割することによって求積することができる。(表現・処理)	合成された図形の面積を、正方形や長方形に分割することによって求積することができる。(表現・処理)	①正方形・長方形の面積を求める式の確認(既習内容の確認) ②この図形(フラッシュカード)の面積を求めよう ③分割・分割・全体から引く・切って貼り付けて長方形にする ④練習問題をやろう。ただし、2つの方法で面積を求めてみよう ⑤感想をはなそう	正方形・長方形の面積の学習のまとめを提示して準備 上位:多くの求め方 いくつかの求め方で説明できるようにチャレンジを促す 中位:求められる 下位:正方形・長方形の公式が使える「むずかしいなあ!一緒に考えよう!」3つのヒントカードの準備
算数 HA 13年	①多様な方法で長方形に帰着できるように気付かせたい ②課題への意識を高める工夫したい ③1つの形でなく、長方形へ帰着する考えを他へ応用して確認できる場を設けたい	①目標 ②学習課題 ③授業展開 ④発問 ⑤予想される子どもの流れ ⑥具体的な支援方法 ⑦時間配分	A型 個 全体	「3つの部屋の広さを比べる」という場面とできるだけ現実的にとらえさせ課題への必要感をもたせたい。	・1つの方法に固執させない。 ・長方形に帰着できない子へのそのアイデアをひらめかせるための手立て	複合図形を長方形に帰着させれば、既習の長方形の求積の仕方を用いられることに気付かせ複合図形を求積することができる。(表現・処理)	①どちらの部屋の面積が広いかな?(3つの複合図形) ②どうすれば長方形があわさってできた形の面積が求められるかな(長方形に割る・大きな長方形をイメージしていらぬ部分を引く) ③自分なりの方法で面積を求めよう ④全体発表(何種類か違う方法を出す) ⑤どの方法にもいえることはないかな(全体協議) ⑥長方形の分け方を参考に他の部屋の面積を求めてみよう ⑦今日の振り返りをしよう。	・部屋をもちいることで必要感をもたせる ・長方形へ分解できない子には、2つの長方形を色で示したヒントカードをわたす。	

教科/教師/教職階	大切にしたこと	設計した手順	形態	工夫	注意点	目標	評価	発問	備考(手立て)
算数 WA 23年	①本時で押さえないポイントは何か(ねらい)。②そのねらいを達成させるために子ども(クラス)の実態を考え合わせどのような手立てを打つか。③子どもの予想されるつまづきは何か。そしてそれに対してどのような支援をするか。	①目標 ②授業展開 ③学習課題、課題、発問学習活動、授業形態 ④予想される子どもの表れ ⑤評価方法 ⑥時間配分	A型 個 全体	・考える時間の確保 ・考えやすいように方眼紙に書かれた図形のプリントを使用したこと。 ・発表時間の確保	・面積の求め方が1つだけではなく、いくつかの方法がありそれを考えようとする。いくつかある方法の中で求めやすい方法を考えること。	複合図形の面積を工夫して求めることができる。(表現・処理) 視点 ・1つの考えで終わりにせず、友達への考えを聞きあう中で、いくつかの求め方があることを理解しようとしたか。		①(長方形と正方形の面積の求め方を確認する。)②この図形の面積の求め方について考えてみよう。③どうやって面積をだせばいいのかなあ。④考えを発表しよう。⑤どの方法が求めやすいかな。自分が求めやすい方法でこの図形の面積を求めてみよう。	・方眼にこの図形4つを書いたプリントの配布。線を引いたり、色を付けたりするなど自由に促される。 ・つまづいている子には、出っ張り部分に爪楊枝を置いて長方形と正方形ができることを見せ、ヒントを与える。 ・2つの図形に分割して求める方法がやりやすことに気づかせる。
算数 SA 21年	・既習の正方形、長方形の求積方法を組み合わせて求積できるようにする。 ・下位の子どもたちには方眼紙に描いた図や補助線を入れた図を必要に応じて与える。 ・能力の高い子は、他の求積方法を考えさせる。 ・自分の考えをわかりやすく式と図、言葉でまとめわかりやすく友達に伝えさせる。 ・いろいろな求め方(工夫)があることに気付かせる。	①単元 ②目標 ③授業展開 ④予想される子どもの表れ ⑤学習課題 ⑥発問 ⑦手立て ⑧授業形態 ⑨評価方法 ⑩時間配分	A型 個 全体	まずは教材研究をして価値やねらいをつかみそれを子どもたちの実態に合わせてどういう授業に組み立てるかを考える。	・個人で追究する時間を十分保障する。(国への文程) ・自分の考えをわかりやすく(まとめたり、友達とわかりあいつながら話し合えるように配慮する。	既習の正方形・長方形の求積方法を使って複合図形の面積を工夫して求めることができる。	・複合図形の面積の求め方を進んで考えようとする。(関心意欲) ・必要な辺の長さを測って面積を求めることができる。(表現・処理) ・複合図形の面積が長方形や正方形の和や差で求めると考えることができ。(思考)	①どうやって面積を求めたらいいだろう。②正方形と長方形の公式を使って面積を求めよう。(個別) ③面積の求め方を話し合おう(全体) ④学習のふり返りを自分の言葉でまとめさせる。	・つまづいている子への支援補助線入り図形のヒントカードを利用 ・能力の高い子 他のやり方を考えさせる。 ・わからないこと、同じ考えは進んで進んで質問したり発言したりさせ話し合いを深めさせる。
算数 MA 26年	・本時で子どもにつけたい力は何かあるのかということを一に考える。 ・複合図形の面積は、長方形や正方形の和や差で求められることを個に応じて指導したり、求積の工夫の喜びを味わわせてやりたい。	①目標 ②授業展開 ③予想される子どもの表れ ④学習課題 ⑤手立て ⑥発問 ⑦評価 ⑧板書計画 ⑨教具 ⑩時間配分	A型 個 全体	意図的に長さを表さず、複合図形だけを見せ、どこを測定すればこの面積が求められるかというところに焦点を絞っていく。	・個人差に応じた学習活動の支援のあり方。 ・試行錯誤して追究する時間の確保。	面積の意味と測定の意味を理解し、長方形と正方形の面積の求め方ができるようになった子どもたちが、複合図形の場合でも既習の求積方法を使って面積を求められることに気付く、工夫して求めることができる。	・複合図形の面積の求め方を進んで考えようとする。(関心意欲) ・必要な辺の長さを測って面積を求めることができる。(表現処理)	①(求めたい図形を提示)この面積は求められるだろうか。 ②4つの辺の長さをはかって面積を求めよう。 ③面積の求め方について話し合おう。	・周りの長さを全部測って区別してしまふ子が考えられるので、4つの辺のみを測定できるという条件をつける。 ・友達とが持てる子には、いくつかの求積方法を考えさせたい、より簡単な求め方を追究させる。
国語 OK 15年	①教材をどのように子どもの活動につなげるのか(教材を学ぶのではなく教材で学ぶこと)	①目標 ②学習活動 ③学習課題 ④手立て ⑤発問 ⑥予想される子どもの表れ ⑦評価方法	B型 個 全体 小集団 全体 個	①子どもの意見から展開する。疑問・発見(気付き)を操作する ②事後の活動に生かせるようにする(書写、図工では短冊などを作る)	・俳句の読みとりと終始することのないようにすること。 ・時間をあまりくつきり考えないこと	上位目標 芭蕉の俳句を読み取ることを通して俳句の作り方やおもしろさを知り、自分でも俳句を作ってみる。 下位目標 ・俳句のきまりが理解できたか(知識・理解) ・俳句のおもしろ味を感じ自分でも作ってみようとしたか。(関心・意欲)	①「開けさや岩にしみいる雫の声」この文から考えることを話し合おう(個) 気付くこと(文の形、リズムム)、分かれること感じたこと(文の内容)、知りたこと(疑問)の3つのカテゴリに分類(全体討議) ②俳句について(全体) ③芭蕉はこの俳句で何を伝えようとしたのだろうか(グループ全体討議) ④俳句の背景を説明する ⑤俳句になろう ⑥振り返ろう	気付くこと(文の形、リズムム)、分かれること感じたこと(文の内容)、知りたこと(疑問)の3つのカテゴリに分類し知りたこと(疑問)を後の展開につなげていく、各自俳句を作成する。(活動へつなげる)	

教科	教師	教職歴	大切にしたこと	設計した手順	形態	工夫	注意点	目標	評価	発問	備考(手立)
国語	MO	18年	①目標の設定 ②目標から俳句そのものを分析的に追求する指導方法がベストであると考えた。 ③これから課題、発問を設定し、その発問にあてはまる授業形態を設定した。 ④そのときに予想される子どもの表れによって、発問と授業形態の整合性を確認	①目標 ②手立て ③学習課題 ④発問 ⑤学習形態 ⑥子どもの表れ ⑦評価方法	B型 全体 個 小集団 全体	・「木」や「蝉」-話者の目」のカードを用意しイメージした位置関係をグループで話し合う ・辞書の利用 ・難しい課題に対してはグループ活動を設定した。	値の考えをしっかりとらせる	①短歌や俳句の表現を味わい、情景や心情などを創造しながら読めることができる。 ②繰り返し音読し、七五調のリズムを楽しむことができる ③学校生活を俳句に表現することができる。	(関心)進んで友達との考えを聞き自分の考えを持つようとしている。 (知識)必要に応じて国語辞典を活用している。 (言語)言葉から話者の表現したい気持ちを読み取り俳句を詠んで得た知識をまとめる。	①音読して暗唱する ②この句は1日のいつ頃だと思いますか？ ③最初に自分のイメージを絵にかきましょう。 次にグループで俳句を読んで想像した様子で「木」「蝉」のイラストを使ってえがきましょう ④「話者」の位置はどこをかきましょ ⑤話し合ったことから、自分の考えをまとめよう ⑥この俳句から想像できることを文にしてまとめよう ⑦次は小学校生活の俳句を作ってみよう。	・俳句を詠んでみイメージ図を作成 ・「木」「蝉」のイラストを準備し、配列を組み替えることにより情景が描けるようにする。
国語	SA	14年	①言語活動を通して育む資力 ②子どもの興味関心の持続 ③学びの充実感 ④学習内容の定着 ⑤学びの継続につながる環境整備(教室掲示・他作品紹介)	①目標 ②教材研究(内容理解) ③手立て ④学習課題 ⑤発問 ⑥予想される子どもの表れ ⑦発問・手立ての修正 ⑧形態の工夫 ⑨時間配分 ⑩評価方法	B型 全体 個 小集団	・単に「読む」「字を書く」だけで終わらないような工夫として言葉で表現しきれない部分を絵・色で表現する (表現方法の多様化) ・事象の発展(指示、句に親しむ取り組み) ・旅団は壁面へ掲示 学習環境を配慮 ・言葉のイメージ重視	・難解な語句、イメージからくる拒絶感への対処。自分の思いをいかに伝えられるか ・他者の思いをいかに受容するか(共通するか・コミュニケーションを促すための指導) ・言葉と子どもたちの世界をいかに共有させるか	俳句の言葉のリズムやすぐれた表現に目を向けて読むことを通して味わい、俳句に含まれる語彙や自分の思いを自分なりの表現で表現することができる。(言語の力)	(視点)作品の特徴の表れた表現を見つけ出し、その表現を味わいながら作者の表現しようとした世界に迫ろうと自分の言語活動への意欲を深め様々な方法を用いて工夫して表現しようとしていたか。	①おくの細道や芭蕉の紹介 ②学習課題提示「芭蕉の俳句の世界を味わおう」 ③句を詠んでみよう 「栗」「岩」にみている「銀、銅の声」の3つに分類しそれぞれのイメージを確認 ④句について思い浮かんだイメージを言葉や絵で表してみよう ⑤みんなで自分の読みを紹介し合おう ※進み具合により、完成した子の作品紹介か、全体発表か小グループ発表とするかを決定する ⑥本時の振り返り(ワークシートへ自己評価) ⑦松尾芭蕉の作品紹介 俳句の他の作品紹介	・おくの細道の旅程図を見せて、芭蕉を紹介(各自の知っている地名事柄を発表する。様々な情報をもとにして芭蕉の目的を予想させ興味関心を高める) ・山寺の動画を見る ・句から浮かんだイメージを絵で表してみる。 次時「作品発表会」俳句作り
国語	YA	17年	①何を指導するのか(目標) ②学習活動の展開(どのような順序) ③終末の段階(授業後につながるような終わり方)	①目標 ②学習課題 ③授業展開・学習活動 ④予想される児童の表れ ⑤教材以外の俳句 ⑥支援と留意事項 ⑦時間配分 ⑧評価	B型 全体 個 小集団 全体	・教材の一句にとまらず、芭蕉の他の句を取り扱ったこと ①読みに抵抗がある児童のために例を示し、読み方・学び方の確認の段階を取り入れた。 ②授業後も俳句に親しんでいくことができるよう、広げる段階で別の句を取り扱った。芭蕉だけでなく、他の著名な俳人の作品に興味をもったり、俳句を作ってみたりと思えるような展開を心がけ、読む態度の発達につなげた。 ・味わう活動に、絵で表す活動、生まれた場面を脚本化する活動の設定 ・個の読みに終わらずグループへと形態を変え、友達との臨場性に触れる場を設定することで、自己満足の読みからさらた発展した読みにつなげられるよう期待した。	一人学びに入る前に、学び方をしっかりと確認しておくこと 個別指導の際(一人学びの段階)適切な支援ができるようになること 伝え合う活動の見届け(自己評価・相互評価を評価の見届け) 読む活動の大切さを知らせる(短絡的に絵を表す活動を選んだり、脚本化する活動を選んだりしないよう配慮する)	題材「俳句を読もう」 松尾芭蕉の俳句を、声に出して繰り返し読んだり背景を絵に表したりして味わい、感じたことを友達に伝えることができる。	読んだり絵に表したりして、俳句を味わっているか。 感じたことを友達に伝えられたか。	①いろいろな俳句を声に出して読む。 ②俳句を味わい、感じたことを友達に伝え合おう。 ③「山路来て何やらゆかしみれ草」を用いて17音で構成されていることや、季語、芭蕉が技術として高めたことなどを概説する。 ④絵に表し、この俳句が生まれた場面を脚本化する。 ⑤本時の学習について振り返ろう。	正岡子規の俳句をはじめ優れた俳人の俳句集を作成し、あらかじめ配布しておく。 ・はじめて俳句を学ぶ子どものために例から俳句のきまりについて概説する。 ・読みにつまづいている子どもにははらずら読めるよう節を示す。 ・この俳句が生まれた場面を脚本化する。
国語	HA	15年	・教材の価値(この教材を学習することによって児童にどんな力がつとえられるか)。 ・一人ひとりの活動時間が、十分に確保できるような活動内容 ・児童の出番を多く取り入れた学習過程。 ・この教材を効果的に学習していくために教材の価値と児童の実態を結びつけていく必要がある。	①児童の実態 ②単元 ③目標 ④手立て学習課題 ⑤授業展開 ⑥学習活動 ⑦学習課題 ⑧発問 ⑨授業形態 ⑩予想される子どもの表れ ⑪時間配分 ⑫評価方法	A型 全体 個 小集団 全体	・この句から感じた情景を絵で表し、自分の作品を紹介し合うことのでこの作品の情景を理解していく。 ・それぞれが感じた思いを大切に描いていく。それによって俳句がおもしろい、他の俳句も読んだりしてみたいという気持ちになり、 ・他の書物や教師の価値観をおしつけない。	俳句の表現上の特徴を知り、芭蕉の俳句に込められている情景を味わうことができる。	・芭蕉の句から感じた情景を絵で表したり、友達に伝えようとするところから、(関心意欲)	(数句の俳句を提示し、音読する。) ①これらの作品の共通点を見つけよう。(芭蕉の句を音読する。) ②芭蕉の俳句はどんな情景をうたったんだろう。(単語を確認) ③感じた情景を絵で表してみよう。 ④自分の作品を紹介し合おう ⑤芭蕉の句を音読する。 ⑥芭蕉の他の作品を紹介する。	・俳句の特徴に関しては短冊に書いたものを準備する。 ・絵だけでなく言葉の説明を入れ、より具体的な表現にしてい。 ・児童の作品を板に提示しながらそれぞれの感じたことを板書していく。	

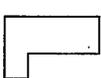
資料 1

算数科学習指導案

1 目標

長方形と正方形の面積の求め方を学習した子どもたちが、L字形の求積方法を考えることによって、L字形は長方形や正方形を組み合わせた図形としてとらえ、長方形と正方形の面積の公式を使えることを理解する。

2 指導過程

段階	学習活動 教師の働きかけ・予想される子どものあらわれ	形態	支援及び評価
つかむ	<p>(問題) 2つの板チョコがあります。どちらのチョコを方がもらった方が得かな?</p> <p>ア  イ </p>	一斉	<ul style="list-style-type: none"> 問題を示す。ここでは、辺の長さや1cmマスなどは提示しない。 自由な発言を促し、その根拠を問う。 子どもたちが、共通の基準で2つを比較することや面積に注目して考えることに必要感をもてるように配慮する。
見通す	<ul style="list-style-type: none"> アの方が幅があつてたくさんありそうだよ。 イの方が横に長いから、きっと大きいと思うよ。 比べる基になるものがないからこのままじゃわからないよ。 	個	<ul style="list-style-type: none"> 根拠を示しながら問題に対する見通しをノートに書くように指示する。
追究する	<ul style="list-style-type: none"> 2つのチョコを比べるためには、どうすればいいのだろう。 大きいとか長いとかじゃなくて、広さ(面積)で比べればいんじゃないかな。 面積を調べるためには、辺の長さを知りたいな。 でも、私たちは長方形と正方形の面積を求める公式しか知らないよ。この公式で求められるのかな。 2つのチョコの面積を求めてみよう。 1cmの正方形を書き込んで、2つの長(正)方形にその数を数えてみよう。 	個	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの根拠に基づいた推論をしているか。(考) 子どもから求められた時点で、辺の長さを示す。 各自の見通しに基づいて2つの面積を求め比較するように指示する。 アとイの図形を印刷したプリント配り、かき込んだり切り取ったりしてもよいことを伝える。 1つの求め方を考え終わった子には、別の求め方がないか尋ね、考えてみるように励ます。 悩んでいる子には面積の単位量が1cmであったことを確認し、1cmの正方形に区切った別のプリントを与え、正方形の数を数えるように助言する。
練り合う	<ul style="list-style-type: none"> 大きい長(正)方形を考えて、へこんだところをひいてみよう。 動かして1つの長方形にしてみよう。 	グループ & 一斉	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの考えに共通するもの(長方形や正方形の求積公式を使う)を導くように促す。
まとめる	<ul style="list-style-type: none"> 考えたことを話し合ってみよう。 1cmの正方形を数える考えは、どんな形の時にでも使えるけれど、時間がかかって面倒だな。 どこかに直線を1本引けば、2つの長(正)方形に分けて考えられるのは便利だな。 ばくは気付かなかったけど、へこんだ部分にも図形があると考えると、後からひく方法もおもしろいね。 動かして1つの長方形にしてしまえば、長方形の面積を求める公式で計算できるね。でも、このやり方だとたくさん刻まなきゃならないし、いつでも使える考え方なのかな。 わかったことをまとめよう。 L字形の面積は、L字形は長方形や正方形を組み合わせた図形と考えれば、これまでに習った長方形と正方形の面積の公式を使って求められる。 問題の答えは、アが27cm、イが28cmなので、イが1cm広くて得することがわかった。 	個	<ul style="list-style-type: none"> ノートにまとめるように指示する。 L字形の面積は、長方形と正方形の求積公式を使って求められることを理解している。(知・理)

資料 2

第4学年 算数科学習授業案

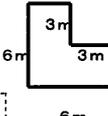
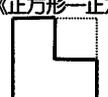
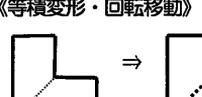
1. 本時の目標

- ・ 複合図形の面積の求め方を、既習図形の求積方法を生かして考えることができる。(数学的思考)
- ・ 友達との話し合いの場面で、説明や質問など、課題解決に向け積極的に関わることができる。(興味関心意欲)

2. 本時の視点

- ・ くの字型の面積について、算数的活動(切る、折る、貼る、測る、補助線を引くなど)を通して、既習図形(長方形・正方形)に変形させながら、いろいろな求積方法(分割方式・倍積変形・等積変形移動・正方形→正方形)を、考えることができたか。

3. 本時の展開

段階	学習活動と予想される子どものあられ	留意点・手立て・評価規準
導入 課題提示 (全体)	<p>○これまで学習してきた内容を発表してみよう。</p> <p>【学習課題】</p> <p>4年生の花壇に肥料をまきたい。 花壇の面積を求めてみよう。</p>  <p>方眼の数を数えて求める。 面積は27㎡になる。</p> <p>面積の求め方を知っている形に変形する。 ①補助線を使い切断。②2つを組み合わせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既習図形の求積方法を掲示しておく。(長方形・正方形) ・ 方眼のマス目に描かれたくの字型の図形も準備する。実際は1mを1cmとする。 ・ *くの字型の図が描かれたワークシートを自由に使えるように、十分用意しておく。 ・ 図形セットは必ず準備させる。(はさみ、糊、定規、コンパス、分度器、三角定規)
問題把握	<p>【学習問題】</p> <p>くの字型の面積を今までに習った面積の求め方を使って求めるにはどうすればよいのだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1つの求積方法で満足せず、複数の方法を考えられるよう促す。(個への支援)：段階別ヒントカード ○既習の求積方法とその公式の確認 ○その形にするためにくの字型をどうすればよいかの見通し <ul style="list-style-type: none"> ・ 等積変形 どこを切る？ ・ 倍積変形
追求 (個別)	<p>《分割方式》</p>  <p>$6 \times 3 + 3 \times 3$</p> <p>《正方形→正方形》</p>  <p>$6 \times 6 - 3 \times 3$</p> <p>《倍積変形》</p>  <p>$6 \times 9 \div 2$</p> <p>《等積変形・回転移動》</p>  <p>9×3</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○既習の求積方法とその公式の確認 ○その形にするためにくの字型をどうすればよいかの見通し <ul style="list-style-type: none"> ・ 等積変形 どこを切る？ ・ 倍積変形 【ワークシート】 ●自分の求積方法を友達に筋道立てて説明する方法を工夫させる。
(小集団)	<p>《等積変形・移動》(面積保存)</p>  <p>3×9</p>  <p>7.5×6</p> <p>*この他にもあるが、多様性とその価値についての確認。</p>	<ul style="list-style-type: none"> (評)個々に追求する場面で、様々な求積方法で、くの字型の面積を求めることができたか？ ・ 自分なりの表現方法で友達わかってもらえるように説明する。 ・ この図形だからできる方法から一般化へ。補助線の価値。 *教え合うことによるお互いの深まり、定着をはかる。
まとめ 自己評価	<p>◎自分が気に入った方法を友達と説明し合い、その中で、いつでも使える方法はどれか考えてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4人班で、自分の考えた方法を1つずつ説明し合う。 →多様な方法を確認し、いつでも使える方法を話し合う。 <p>・ くの字型の面積の求め方はいろいろあるんだ。</p> <p>・ 今までに習った図形の求め方を生かせば、くの字型の面積も求められるんだ。</p> <p>・ くの字型も、長方形や正方形に分けて計算すれば、面積を求められるんだ。</p> <p>・ くの字型の図形だけでなく、どんな図形でも、補助線で分けたり、変形移動したりすれば、面積を求められそうだな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 【ワークシート】 ●自分で気づいた方法、友達の見方からわかった方法など、自分の言葉で記入させる。
次時予告	<p>○教科書のいろいろな図形の面積を求める問題に挑戦してみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書の問題 P16,17

資料 3

国語科指導案

1. 目標 「芭蕉の俳句を読み取ることを通して俳句の作り方やおもしろさを知り、自分でも俳句をつってみる。」
2. 視点
 - ・俳句のきまりが理解できたか。(知識・理解)
 - ・俳句のおもしろさ味を感じ、自分でも作ってみようとしたか。(関心・意欲)

学習活動		留意点・手立て
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 閑けさや岩にしみいる蟬の声 この俳句から考えられことを話し合おう </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;"><u>気づくこと</u> (文の形リズム)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「5・7・5」になっている。 ・標語によくある ・リズムがよい ・他にも知っている ・俳句というものだ(川柳…?) </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;"><u>わかること・感じたこと</u> (文の内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岩がある場所山かなあ? ・蟬がいないから夏の様子だろうか。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;"><u>知りたいこと</u> (疑問)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蟬がいないのになぜ閑かなのだろうか? ・岩にしみいるとはどういうことか。 ・場所はどこだろうか? </div> </div>	<p style="text-align: center;">個 5</p> <p style="text-align: center;">全体 10</p>	<p>まず個別に考えさせる 視点として</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文形に関すること ・内容に関すること ・知りたいことを意識させる。 ・疑問は後の展開につなげるようにする。 →短冊などにかいておく。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 俳句について <ul style="list-style-type: none"> ・5・7・5の中で情景や思いを表す ・季語を入れる→川柳との違い(この句の場合は蟬) </div>	<p style="text-align: center;">全体 5 小集団 全体</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句のきまりなどについて子どもに提示する。 ・季語もいくつか紹介する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 松尾芭蕉はこの俳句で 何を伝えようとしたのだろうか。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・せみの声の他には何も聞こえない夏の日のこと ・岩にまでしみとおるように蟬の音がすること ・暑い日だけどひんやりしている場所にいること ・みんなもきかせてあげたい蟬の声のこと 	<p style="text-align: center;">個 15</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・先程出された疑問をもともう一度考えてみる。 ・自分たちが受け取り手であることを意識して伝わってくることを出し合う。 ・小集団で意見を出し合い全体へつなげる。 ・本句の解説を提示する ・俳句の受け取り方に正誤はないことを示唆する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> この俳句の背景を説明する </div> <ul style="list-style-type: none"> ・山寺が舞台である蟬はいいにいい蟬と言われているが? ・おくの細道について 		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 他にもこんな俳句があるよ </div> <ul style="list-style-type: none"> ・他の俳人の句を紹介する 		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 俳人になろう (個人で俳句を作成する) </div> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に俳句を作る(教室の外に出てもOK) 今日の学習をふり返ろう 		<ul style="list-style-type: none"> ・書写の時間などを使って短冊に書かせ発表の場を設ける。

資料 4

国語科授業案

- 1 目標 (ねらい)
俳句の言葉のリズムやすぐれた表現に目を向けて読むことを通して味わい、俳句に含まれる語感や自分の思いを自分なりの方法で表現することができる。(言語の力)
- 2 視点
作品の特徴の表れた表現を見つけだし、その表現を味わいながら作者の表現しようとした世界に迫ろうと自らの言語表現への意識を深め、様々な方法を用いて工夫して表現しようとしていたか。
- 3 本時の展開

学 習 活 動	留意点・手立て		
<p>○「おくのほそ道」旅程図を見て、松尾芭蕉の人物紹介 (各自の知っている地名や知っている事柄を発表する。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松尾芭蕉…伊賀(三重県)生まれ。 ・「おくのほそ道」: 1689年江戸の自宅を旅立ち、東北地方横断し、伊勢長島に9月6日に着くまでの旅行記。 <p>○句・学習課題提示</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-right: 20px;">松尾芭蕉の俳句の世界を味わおう</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">句「閑さや…」</div> <p>○句を読んでみよう。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・リズム感(5・7・5)があって読みやすい。 ・短い句なのに、芭蕉の旅の思いが詰まっている感じ ・～な景色が浮かんでくる。(季節感) </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin: 5px 0;"> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; text-align: center;">「閑さ」 のイメージ</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; text-align: center;">「岩にしみいる」 のイメージ</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; text-align: center;">「蟬」「蟬の声」 のイメージ</div> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・きつと芭蕉は□□な気持ちでこの句を詠んだんだろうな…。 ・芭蕉には△な景色が～のように映り▽な気持ちになったんだ。 </div> <p>○「閑さや岩にしみいる蟬の声」について思い浮かんだイメージを言葉や絵で表してみよう。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> 【使う画材】 ・画用紙(白、カラー) ・色鉛筆、絵の具 ・墨 </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> 【表現する視点項目】 ・どんな所が気に入ったか ・どのような情景が浮かんだか </td> </tr> </table> </div> <p>○みんなで自分の読みを紹介し合おう。 (進み具合により、完成した子の作品紹介か、全体発表か、小グループ発表とするかを決定する。)</p> <p>○本時の振り返り: 【ワークシート(自己評価)】</p> <p>○松尾芭蕉の作品紹介 俳句の他作品紹介</p> <p>○次時の予告『作品発表会』『俳句作り』</p>	【使う画材】 ・画用紙(白、カラー) ・色鉛筆、絵の具 ・墨	【表現する視点項目】 ・どんな所が気に入ったか ・どのような情景が浮かんだか	<p>☆資料:「奥の細道」旅程図</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旅の行程を地図で辿り、所要日数や距離、訪れた場所、当時の生活など、様々な情報をもとにして芭蕉の旅の目的を予想させ、興味関心を高める。 <ul style="list-style-type: none"> ・俳句の土台をなす季節感に目を向け、季節感を表すできごとや表現に注目しながら学習を進める。 <p>☆画用紙(八切)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視点が入っていれば、レイアウトは自由とする。 <p>☆山寺立石寺の動画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イメージがなかなか浮かばない子には、板書や立石寺の動画などを見せる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>評価: 作品、プレゼンの様子</p> </div> <p>☆ワークシート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の良い所、共感した所などはワークシートに書き込む。 <p>☆エピソード紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数回の推敲を重ねてできた句であること【※1】 ・解釈を巡り、議論が戦わされていること【※2】 <p>☆山寺立石寺の写真 or 動画</p>
【使う画材】 ・画用紙(白、カラー) ・色鉛筆、絵の具 ・墨	【表現する視点項目】 ・どんな所が気に入ったか ・どのような情景が浮かんだか		

【※1 推敲の過程】・初案「山寺や石にしみつ蟬の聲」(『俳諧書留』曾良)

・第2案「さびしさや岩にしみ込む蟬の聲」(『初蟬・泊船集』)・現在

【※2 議論について】

・蟬は<春蟬>か?、<にーにー蟬>: 小宮豊隆 か?、<油蟬>: 斎藤茂吉 か?。

→この句が太陽暦では7月13日の作であり、その頃にはまだ山形では油蟬は出現していないことから、この句の蟬は<にーにー蟬>であったことで両者の間では決着した。

・蟬は単数なのか、複数なのか。・岩の成分や形状にまでは話が及ばなかった。

【発展】

- ①時期に合わせて、校内行事や身の回りの生活などを題材にした俳句作りを単元構想に位置づける。
- ②事後の取り組みとして、掲示コーナーなどを設け、身近な人達や同世代の人たちの俳句にもふれることによって、俳句を鑑賞したり作ったりすることが直接自分の世界を広げたり、表現を考える学習に結びつくことを実感させたい。